



リスペクトF.C. JAPAN 設立1周年記念シンポジウム ～リスペクトを考える～(抜粋)

©Jリーグフォト

公益財団法人日本サッカー協会（JFA）は9月2日、日本サッカーミュージアム内のヴァーチャルスタジアムで「リスペクトF.C. JAPAN設立1周年記念シンポジウム～リスペクトを考える～」を開催しました。その模様を要約してご紹介します。



パネリスト

田嶋幸三 (JFA副会長、リスペクトF.C. JAPAN GM)

上川徹 (JFA理事、リスペクト・フェアプレー委員会委員長、元国際審判員)

眞藤邦彦 (JFA指導者養成ダイレクター)

藤田俊哉 (元日本代表選手、元プロ選手)

山岸佐知子 (国際審判員)

上川 今年、世界でいろいろな大きな大会が開催されています。6月にはヨーロッパ選手権 (UEFA EURO 2012) がありました。そこでもヨーロッパサッカー連盟 (UEFA) としてさまざまなリスペクトの取り組みが行われたと聞いています。

田嶋 UEFAの取り組みは、ずっと関心を持って見えています。最初にUEFAから学んだのは「グリーンカード」です。皆さんは既にグリーンカードをご存じかと思いますが、全日本少年サッカー大会 (全少) 等で導入しています。これがスタートした当初、最初に全少の大会でグリーンカードを使ったときには、なかなか出ませんでした。悪いことに対するイエローカードとかレッドカードには慣れていてしっかりと出せるのですが、褒めるカードであるグリーンカードをうまく出せませんでした。それが続けていくうちに100枚以上出るようになりました。12歳以下の子どもの大会で褒めてあげるといことは非常に大切に、褒められるというポジティブな動機づけでルールを守る、相手をリスペクトする、そういうことが身につけていくのではないかと思います。

一般的に、フェアプレーコンテストは、イエローカード、レッドカードが少ない、ネガティブ要素の量で評価する消去法、最後にそれが一番少ないチームがフェアプレー賞をもらうという考え方でやってきました。その方が客観性があるやりにくいということがありますが、ヨーロッパは以前からポジティブプレー、例えば最後まで攻撃的にプレーをしたであると

か、諦めないでプレーを続けているとか、相手や審判へのリスペクト、観客やチームの役員の振る舞い等、そういうものも評価の対象に入れています。しかも、EUROなどUEFA主催大会のレギュレーションを見ていただくと、順位の決定方法として、勝点やその他の条件が並んだ場合、最後にフェアプレーポイントが多い方が勝ち上がるということになっています。つまり、先ほど言ったようなポジティブな指標で、毎試合しっかりしたフェアプレーの評価をしているということです。UEFAでは毎シーズン通年で、UEFAの大会での代表とクラブの試合、全てを対象にフェアプレーポイントをつけていて、優勝した国には、UEFAヨーロッパリーグへの参加枠を与えています。それくらいの意味づけをしているということです。われわれも学ぶべきものがあると思っています。

それを日本で先んじてやってくれたのが神奈川県、県の大会で早速ポジティブな評価も入れていこうということで始めてくれました。その後、チビリンピックや全日本少年サッカー大会、プリンスリーグ、キリンチャレンジカップ等で実施するようになっていきます。レフェリーがグリーンカードを出すのをためらってなかなか出しにくかったのと同じように、ポジティブに評価するというのは日本人は苦手なようで、実際の評価は初めのうちはなかなか難しかったのですが、長年やってきている中で定着してきています。こういうものを、さまざまな場面で生かしていければと思っています。

上川 UEFAはチャンピオンズリーグ等も含め、レフェリーと選手の袖にリスペクトのマークを付けていて、そういうことを意識しながらプレーしなさいということになっています。

今、グリーンカードの話が出ましたが、全日本少年サッカー大会ではどんなふうに行われていますか。

眞藤 当初は慣れていなくて、緊張して厳しい顔をして出すような状況

もありましたが、最近では審判も選手も慣れて、全力を尽くすがすがしいプレーに対して、自然に出せるようになってきていると思います。また、大会の初めはなかなか出せなくても、試合を重ねる中でインストラクターからのアドバイスもあり、自信を持って自然に出せるようになっていきます。広がってほしい取り組みだと思っています。

山岸 当初導入されたときに、出し慣れていないので、どういうふうに出せばいいか、という指導がありました。私たちは違反をしないというところをつい真剣に見てしまうのですが、いいところを見つけていこうというのは、とても勉強になりました。

上川 藤田さん、もらったことはありますか？

藤田 グリーンカードが始まったのは数年前ですよね？僕が全日本少年サッカー大会を経験したのは20数年前になるので、その頃、僕もグリーンカードをもらえていれば褒められる経験ができて、もっともっと良い選手になれていたのではないかと思います。プロになって一生懸命やって上川さんにもたくさん笛を吹いてもらいましたね。僕のキャリアの中でグリーンカードは何枚くらいもらえそうでしたかね。

上川 ほぼ全ての試合において非常に協力してくださっていました。瞬間的にカチンと熱くなることもありましたが…(笑)。

グリーンカード、非常に良い取り組みだと思います。私も今年、全日本少年サッカー大会を観ました。やはりカードの出し方について、せっかくいいことをしたのだから、レフェリーが笑顔で、できれば少し体にも触れながら出してあげたら、子どもたちはやはりうれしいし、「良いことをすれば褒められるんだ」という気持ちになって、もっとそういう行動をとれるのではないかと感じました。

一昨年、名波(浩)さんの引退試合の笛を吹かせていただいたときに、初めて「グリーンカードを使ってもいいですか」と投げ掛けて、「ぜひやってください」と選手からも言われて使いました。その試合で2枚出したのですが、途中から、皆「グリーンカードちょうだい!」の状況になりました…(笑)。非常に良い取り組みで、大人のサッカーであってもそういうのもあって良い、気持ちの良いことだと思います。

今年は、ロンドンオリンピックもありました。山岸さんはオリンピックに行かれましたが、何かフェアプレーやリスペクトに関する経験などがあれば聞かせてください。

山岸 今回オリンピックに参加するにあたり、まずゲームが終わった後に選手と気持ち良く笑顔で終われるゲームができればいいなと思っていました。私が最初に担当した試合はグラスゴーで、アメリカ対フランスの試合でした。両チームとも非常にレベルが高く、集中しているプレーの中で、非常に際どいプレーもあったのですが、ゲームが終わって選手と笑顔で握手ができたのが非常にうれしかったです。審判は試合開始90分前にピッチチェックをするのですが、芝生に一歩足を踏み入れたとき、「なんてすばらしいところなのだろう!」と思いました。緑色のカーペットのような芝生で、ピッチチェックで歩いているうちに、「早くここで試合がやりたいな」という気分になり、一人で自然と笑顔になってピッチを歩いていました。オリンピックをやるにあたり、審判や選手もそうなのですが、関係者やピッチを整備する方も、とても想いを込めて準備をしていらしたの

だなと感じました。

また、若い方から年配の方まで、非常に多くのボランティアの方が大会に関わっていました。自分の国でオリンピックが開催されるのをとても楽しみにしていたようで、「私の国をぜひ楽しんでってください」といった感じで、どこに行っても笑顔で案内をしてくださったことも非常に印象に残り、心が温まりました。

田嶋 昨年、女子ワールドカップのアメリカ女子代表の(アビー・)ワンバック選手の決勝後の立派な振る舞いについて話題にしたのですが、今年は宮間(あや)選手が準決勝のフランス戦後、同じようにすばらしい態度を示してくれました。宮間選手と同じチームだった選手がいて、試合直後にその選手のところに行って、互いの健闘をたたえ合っていたシーンがありました。「サッカーは勝っても心が痛く、また心が洗われると思う」という言葉を残しています。単純に勝った勝ったと喜ぶだけでなく、相手チームを思いやる気持ち、そういう態度を数人の選手が見せてくれたのは、非常にうれしく思いました。それから良い面、悪い面があったのですが、表彰式では泣いていた選手が切り替えて、2位という結果を素直に喜びながら笑顔で表彰台に向かったということ。これは彼女たちが負けもしっかりと認めつつ受け入れて喜ぶという良いことだったと思っています。

上川 藤田さん。選手として経験されてきて、負けた後の態度、振る舞いについて意識されていたことはありますか。

藤田 一生懸命90分プレーして、その結果というのは、切り替えなければいけない部分があります。試合をすれば勝ちも負けもあるので、そこからはお互い健闘をたたえ合うということで、「さっぱり行こうぜ」というのが僕のポリシーでした。質の高いサッカーを目指して健全にファイトすればいいのではないかと思います。

上川 FIFAの行動規範にもある「優雅な敗者となる」ということ。「グッドルーザー」という言葉もよく聞かれます。あまり判定のことは話をしたくないのですが、(オリンピック女子)決勝戦で一度、ペナルティーエリア内で相手の選手の腕にボールが当たった瞬間があったかと思います。PKが与えられ、入れば同点になるかという場面。普通ならあの瞬間に不満を持ったり、あるいは試合が終わった後にそのことに対するコメント等が聞かれてもおかしくなかったかもしれませんが、全くそんなものを感じさせない試合で、私も感動しました。

眞藤さん、指導者として、試合中にそういう場面が起きたときに、何か選手に言葉掛けなどはありますか。

眞藤 非常に難しい問題かもしれませんが、全力を尽くして戦うということと、その中での判定を受け入れながらゲームに集中し、次のプレーに速やかに移っていく、プレーをする、ということ。それがプレーヤーもですし、見ている人にとっても心地良いのではないかと思います。ぜひそういうプレーをたくさん見たいなと思います。

上川 グッドルーザー、そこで切り替えること、というのは、大東(和美)Jリーグチェアマン(JFA副会長)からもありましたが、自己の闘争心をコントロールし、自分の気持ちを再び試合に向けさせるということにつながっ

ていくのではないかと思います。昨年の子女子ワールドカップの決勝の話が出ましたが、試合終了間際、岩清水(梓)選手が一発退場になったシーンがありました。あのシーンでは、本人も素直にフィールドを離れた。周りのチームメイトも落ち着いていた。そういう対応が、フェアで勝利にも結びつく、素晴らしい結果につながっていったのではないかと感じます。この辺はフェアプレー、リスペクトを考える上で非常に大事な出来事であったと思います。フェアプレーに関して、ロールモデルとして、子どもたちのサッカーにもそのプロの選手たちの影響力は非常に大きなものであると思います。眞藤さんにお聞きますが、指導者、育成年代の子子どもたちを指導するにあたり、大事にされていらっしゃることは何かありますか。

眞藤 「全力を尽くしてプレーできる、それを楽しむ」ということを追求していったときに、人としての生き方が出てくるのではないかと思います。そういうところを現場の指導者だけでなく、保護者も含めた周りの大人たちがしっかり見守ってあげられるようになっていったらいいのではないかと思います。全力を尽くしてやる中で、得られたもの、あるいは失ったものがあったかもしれない。その両方で、その経験を生かしながらも次への切り替えをする。選手や子どもは、負けたいと思ってプレーしているのは誰一人としていないと思います。その中で努力をし、いろいろトライする。それを見守るところが、周囲の大人としてはすごく大事ではないかと思います。

藤田 プロになってこういう話を聞いて、そこから変えようというのとはとても難しいと思います。これから自分が指導者を目指すにあたり、サッカーを通してきちんとした人を育てるという重要性があるのだと感じます。これから僕は、人を育てられる指導者になりたい。今さらこうやって「リスペクト」とあらためて言う必要もない、そういう選手を何人も輩出していきたい。僕は親なのですが、親としても子どもに、外で誰かに教えてもらうということではなく、自分で自分の子どもにしっかりしたことを教えられる親でありたいと思います。日頃からやるのが大事だと、今これを聞いていてあらためて思いました。

田嶋 藤田選手の話を少し話をさせてもらおうと、彼は高校、大学、Jリーグとずっと一流選手でいて日本代表に入っていたのですが、ジーコジャパンのときは選ばれていても、必ずしもレギュラーではありませんでした。シンガポール戦で彼が決勝点を入れてくれたのですが、僕が忘れられないのは、出ていないときの態度もすばらしかったこと。出ていないことを如実に不満に表したり、交代させられるときに嫌な態度を見せたりする選手がいます。これは一つには自分の闘争心を外に表すということかもしれないけれど、チームがあり、試合があれば、20数人いる中で誰かがやはり出られないわけです。彼はその中で落ち着いて、模範的なリーダーとしてチームに貢献していました。

藤田 ありがとうございます。良い思い出ですね。欲を言えばドイツに行きたかったです(笑)。

上川 われわれはサッカーファミリーの大きな力を持っていると感じます。一人一人がもっともっと幸せになっていけるように、サッカーを通して取り組んでいければと思います。

皆さんがリスペクトF.C.に入部される時、リスペクト宣言を書いてい

ただいています。すばらしいものばかりなので、ぜひご覧いただきたいのですが、今日こちらに参加されている皆さんから一つずつ、目に留まったものを紹介してもらいたと思います。

山岸 「思いやりの気持ちを、小さな思いやりの気持ちを、大切に」。りょう母さんの宣言です。先ほど、家庭の中でという話が出ましたよね。子どもの頃から相手を思う気持ち、何かをしてもらったらありがとう、何かをしてしまったらごめんなさい、そして相手のことを察する気持ち、これは日本人は優れているのではないかと思います。そういう当たり前の気持ちを、りょう母さんは、小さなときから日頃から小さな思いやりの気持ちを積み重ねていく、ということが大切だとおっしゃっています。原点なのではないかと思って選ばせていただきました。

藤田 「子ども達の将来のために」。僕は、子どもたちは未来の宝だと思いますし、サッカー界にとっても、日本にとっても、きちんとしたことを自分たちが指導したり伝えたりしていけば、未来は明るいのではないかと思います。こういう子どもたちをきちんと育てることは、自分がしっかりしていなければできないことだと思いますので、もちろん僕自身もきちんとしていこうという気持ちになります。一番は、未来に期待したいことが多いことですね。だからこれを選びました。

眞藤 「サッカーを愛し、人を愛し、地球を愛することをここに誓います」。やまちゃんという方の宣言ですが、これを選ばせていただきました。自分の好きなサッカーを、一生懸命楽しんで好きになってもらいたいということがスタートです。そこからチームメイトや対戦相手、関わってくれるいろいろな人を愛することができて、最終的にはこういうことを楽しんでいくことの活動が世界平和につながっていくのかなと感じ、それを言い表してもらっているなと思い、これを選びました。

田嶋 2つ選ばせてもらいました。皆さんの宣言をまとめてもらったのを読んでいると、心が洗われ、涙が出るようなものもたくさんあって迷いました。

1つ目が、「現役中、ほとんどレギュラーになれなかった私。プレー以外にも、たくさん大切なことがありました。自分がプレーするときにはその想いを形に出すようところがけていました」。かっぱえびんさんの宣言です。自分が出ていないときにさまざまな気持ちを持っていた。それをしっかりとリスペクトして自分が出るときには、出ていない人たちの気持ちを含めてプレーしていたという、優しさが伝わってきて、これに感動しました。

2番目は、「先輩方がつくりあげてきた歴史をリスペクト。そして、この子達の未来をリスペクト。その間に立って、私は自分の役割を果たす」。昨年の子女子ワールドカップの後、澤(穂希)選手をはじめ、どのなでこの選手たちも「30年間、女子サッカーに関わってきた人たちのつないできてくれた歴史があったからこそだ」という言葉を言っていました。何となく歴史というと、前の人がこうだったかもしれないけど俺たちは違うといった言い方であったり、スクラップ&ビルドといったやり方などがよくありますが、やはり時代がどう移り変わってきたか、その歴史があったからこそ今があるんだ、ということ認識し、歴史をつないできた人たちをリスペクトすることはとても大切なことだと思います。そして、子どもたちの未来をリスペクト。今の自分たちの気持ちや満足のためではなく、その歴史の大河の中にあって、将来に対して責任を持つ、役割を果たす。この大切さを非常に感じまして、この言葉を付け加えさせていただきます。

上川 私も1つ選びました。「自分に正直に、人に正直に。そして人を大切に、自分を大切に」。いろいろなことが世の中にあり、その時々いろいろなことを思います。その気持ちにいつも正直に向き合って、そして大きな責任が伴うと思いますが、正しいと思ったことを行動に移していくことが大切なのではないか。そしてそれは、相手に対する思いやりがなければ、それは達成できないと思います。そういう意味で、自分に正直に、人に正直に。最後にやっぱり自分を大切にしたい。この言葉に強くリスペクトを感じました。

最後に、皆さんに気持ちを込めて、それぞれご自身のリスペクト宣言をしていただいて、このシンポジウムを終わりにさせていただければと思います。

眞藤 私からは、「リスペクト、気は優しく、力持ち、になることを宣言します」。

育成年代の指導者として、子ども自身が自立していく様子を観て、持っている大きな可能性を感じています。最後にここに行ってほしい。お互いを思いやる気持ち、気は優しく、そして互いに困ったときに本当に力になってあげられるような、そういう自立した子どもが一人でも多く育っていったらいいのではないかな。そういうことが大切に思うことにつながるのではないかと考え、この宣言をさせていただきました。

藤田 僕は、「サッカー、スポーツの素晴らしさを伝えたい」。いろいろな活動を通して、常に一人でも多くの子どもたち、選手の心を育てられるような指導者になりたい。プロでは強いやつが最後に残ると言われます。僕より年長者の2人、カズ(三浦知良)さんと中山(雅史)さんと3人で「最終的に俺たちは何が一番大事だったのかな」という話をする中で、2

人は面白おかしく「根性だな」で終わらせてしまうのですが、そこには本当は、心が強いとか、心を育てないところまでいかないんだ、という想いがある中で「根性」と言っていると思います。そういうところを僕らも大切に、一人でも多くの良い選手を育てたい。そしてやっとサッカーの価値やスポーツの価値が日本で高まってきて、それが明るい将来につながるのではないかと思います。

山岸 サッカーに限らず社会のいろいろな立場の方がいて、自分と必ずしも同じ考えではない人もたくさんいると思います。だけど、お互いのことを理解し合えば、歩み寄れば、いろいろなことが少し変わるのかな、という想いで、「お互いに、理解し合えば、ハッピーさ」ということでリスペクト宣言とさせていただきます。

田嶋 僕は「常にフェアに、常に全力で、常に誠実に」。自分の仕事だけでなく、遊びもこうであるからリラックスできると思います。この言葉をリスペクト宣言にしたいと思います。

上川 少し大きいかもかもしれませんが「スポーツを通じて、世界の平和に貢献したい」。微力です。小さいことしかできないと思います。ただ、こういう気持ちを持っているいろいろな活動で多くの人たちに接する中で、伝わるのではないかと考えて、挙げさせていただきました。

一人一人の小さなことの積み重ねが輪になり、大きなものになり、いろいろなことを動かすことができるんだ、と私はそう信じたいと思います。皆さんもきっとそうお考えだと思います。ぜひこのリスペクトを広めていけるように、われわれも努めていきますので、皆さんのご協力もお願いします。

フットサル日本代表戦でリスペクト宣言



©Jリーグフォト

フットサル日本代表の国際親善試合(10月24日、対フットサルブラジル代表、10月27日、対フットサルウクライナ代表)にて、両チームのキャプテンがリスペクト宣言をしました。また、両チームと審判員がリスペクトフラッグを囲んで写真撮影を行いました。

フットサル日本代表・木暮賢一郎選手(ブラジル戦)と小宮山友祐選手(ウクライナ戦)によるリスペクトメッセージ

「フットサル日本代表チーム・キャプテンとして、我々はフェアに、ルールに従い、対戦相手、審判・役員、観客の皆様をはじめとする全ての人に、この場でプレーできる喜びと、感謝、リスペクトの思いを込めてプレーすることを宣言します。

リスペクトはフェアプレーの原点です。全国の皆さんに、仲間、そして自分を大切にすることを伝えたいと思います。」